

私は、短歌を詠み、Tabotanという作家名で土人形をつくっている。短歌では、取るに足らない日常やすぐに消えてしまいそうな感情を切り貼りして、31文字の小さな詩をつくっている。本書に収めたエッセイも、Twitterで呟くほどでもなく周りの人に話すほどでもない小さな出来事や妄想をかき集めたものになった。

エッセイに度々登場する人物「S」と私は二人暮らしをしている。労働をして家事をして、ほぼ家に引きこもってアニメやYouTubeを見ながら土人形をつくっていた2021年9月から2022年9月までの生活がこの本に詰まっている。

1年間生活と向き合えば、ライフハックも身について何かしら読者の役に立つことも書けるだろうと思っていたけれど、意識が向上するどころか、同じことに悩み、同じ「やらかし」を重ねている気がする。

今日も今日とて、歯磨きチューブを絞っている手にゴミが付いていたので振り払おうとしたら、なぜか反対側の手を振ってしまつて歯ブラシに乗っていた歯磨き粉がビュンツと飛んでいったり、ボン酢を付けて鍋を食べていたつもりがSに「わっこれ、麵つゆだ！ 酸っぱくないのになんで気づかないの？」と驚かれたり、ぼーっと生きているが故の「やらかし」が発生した。

タイトルの「生活フォーエバー」は2021年の夏に名古屋の書店・ON READINGで開催した展示と同名であり、アベンジャーズのスーパーヒーローの一人、ブラックパンサーの名台詞を意識している。ブラックパンサーは「ワカンダ」という国を守る若き国王のだけれど、敵が攻めてきたピンチに「ワカンダフォーエバー！（ワカンダよ永遠に！）」と叫んで立ち向かう姿がめちゃくちゃカッコいいのだ。ブラックパンサーにあやかつて、何かやらかした時には「生活フォーエバー！」とめげずに立ち上がりたいという希望を込めた。

「エッセイを書きませんか」と声を掛けて下さったON READING (ELVIS PRESS) の黒田さんは、短歌を始めるきっかけになった歌集にも出会わせてくれた人だ。季節ごとにエッセイを送るたび「笑いました！ 共感しました！」と面白がってくれたので、黒田さんだけが読む交換日記みたいな気持ちで書いた。

書店もやってギャラリーもやって出版レーベルまで立ち上げて猫も飼っている黒田さんが、この低レベルな日常のどの辺りに共感するのか不思議でもあるのだが、個人的な小さな断片を突き詰めていけば、性格や生き様の違う誰もがほんの少し共通するものを持っているのかもしれない。どのページからでも、労働や家事のちょっとした隙間時間に手に取って読んでいたければ嬉しい。

もうわたしログインなんてこりごりよ生きるしか能がないんだから

「パソコン」

いつかこんな日が来るんじゃないかと思っていた。ついにノートパソコンにコーヒーをぶちまけたのだ。「Twitterなど」のような惨事を目にする度に、私らしそうなことだと思っはいた。しかし目の前で起こるとなかなかの衝撃だ。危惧していたからこそノートパソコンの横に飲み物を置かないように気をつけていたのに、それでもうっかり忘れてやらかすのが私なのだ。俗に言う「引き寄せの法則」というのがある。成功したときのイメージを強くもつことで夢が叶い、幸せになれちゃうらしい素敵な法則だ。その逆バージョンで、ノートパソコンにコーヒーをぶちまける自分があるにはつきりと思いついてしまったことで「やらかし」を引き寄せたのかもしれない。意識すればするほど「やらかし」が迫ってくるなんてホラーである。

Sによく注意されることがある。「なんでそんなにギリギリを攻めてるの？」と言われて目をやると、まるで飛び降り自殺をしようと思いついて詰めているみたいに制作途中の土人形がテーブルの淵に立っている。まるであと一歩背中を押してもらおうのを待っているような姿に背筋が凍り、早まるな！と止めるが、この状況を作りだしているのは自分自身なのでさらにゾツとする。

土人形に限らずテーブルのキワキワのところを置くのは癖になっていて、マグカップやらスマホやら自覚がないのでなかなか直らない。振り返れば授業中も机の端に鉛筆や消しゴムを置いてよく落としていた気がする。

相も変わらず、今日も何かをこぼしたり落したりする未来の種をせっせと撒いている。そのうえ蓄積された過去のこぼしたり落したりした記憶によってまだ起こっていない「やらかし」の明確なイメージが膨らみ、未来の「やらかし」の花が咲くように水を与えているのだ。

現在ノートパソコンはというと、ぶちまけ所が良かったのか何事もなく動いている。が、内部ではじわじわと時間をかけてコーヒーによる錆が侵食しているに違いなく、不穏な静けさが続いている。油断した頃にもう1回くらい何かこぼすような気がしてならない。

そうならないように習慣づいたことがある。サイやバツファローがオアシスで水を得て砂漠へと帰っていく映像を強く思い浮かべて、喉が渴いた時には台所（オアシス）で飲み物を飲み、速やかにパソコンのある作業机（砂漠）に戻るのである。大自然の中で必死に生きようとする野生動物たちのイメージを借りて、「やらかし」のイメージを上書きするのだ。オアシスにはキッチンやヌー、さまざまな茶飲みフレンズが登場し、イメージは更新され続けていく。

そのため台所に行くとき一口だけ飲んで忘れ去られたコーヒーが冷めているのをよく発見するが、こぼすよりは何百倍もマシなので、今のところ引き寄せのイメージ作戦は成功している。

仕事中ノンアルカクテル飲むような舐めた態度で真面目に暮らす

夕方は取り返しのつかない時間うらおもて逆の靴下のまま

「ひじき」

「なんか歯に付いてるよ」と言われたので鏡を見に行き、「ひじきだった」と報告したらSに「貧乏くさっ！」と言われた。確かにひじきは色も形もどことなく辛気臭く、歯に付いていたら貧乏くさいものランキング1位という感じがする。まだ青のりの方がポップな馬鹿さがあるし、ゴマの方が可愛げがある。付いて来ても、まあ笑えるからいつかと許せるタイプだ。ひじきは面白くないうえに「ほくつて、なんかイジりにくいよね……？」と言ってきそうで（そういうとこだぞ！）と腹立たしくなる。きつと芸能人やアイドルは歯並びが良くて歯茎が健康だから、ものが挟まったりしないだろうなと思う。

また別の日、土人形の絵付け作業でヘトヘトになりながら冷蔵庫にお茶を取りに行くと「髪の毛になんか付いてるよ」と言われた。「絵の具でしょ」と雑に言ったら、「わっ、キュウリだ！」と慄おのかれた。半日キュウリを付けて生活していたらしい。キュウリも髪に付いていたら嫌な食べ物の割と上位じゃないだろうか。同じ青臭い系でもまだパクチーとかパセリだったら幾分オシヤレである。ひじきとキュウリよ、もう私に付いて来ないでと言いたい。

Sがタンクトップ姿の私の背中を見て「なんか付いてるよ」と取っつけてくれようとしたこともあった。「ありがとう」と言ったら、「イボだった……！」と言われた。イボとなると、もう私には

どうしようも出来ない。お手上げである。本当にろくでもないものしか私には付かない。

重なって良いのは亀とラザニアだけって不幸に説教をする

いつの日か勇者が抜いてくれる日を待って炬燵に刺さっています

最近、マイブームの言葉がある。それは、「まだ少し先のお話」という言葉だ。一度はアニメなどで「後にこの平凡な少年が最強の勇者と呼ばれることとなる。だが、それはまだ少し先のお話」といったナレーションを耳にしたことがあるのではないだろうか。一見するとネタバレになっってしまう、少年の未来がどうなるのか想像の幅を狭めてしまおうように思える。

しかし、1話を見たところで見続けるかやめるかを判断するようなアニメでは、分かりやすく行き先が示された方が、どこへ連れて行かれるか分からないよりも期待感を持って物語に乗ることができるのだろう。最終的に期待が叶うことが約束されながらも予想を裏切られ、（絶体絶命じゃん！ これで最強の勇者になれるの？）とハラハラドキドキしたいのだ。

「まだ少し先のお話」は日常生活においてもなかなか便利な言葉だ。シンクの中に洗い物が溜まってモヤモヤ罪悪感を感じているときにも、「洗い物、それはまだ少し先のお話」と言っておく。すると未来の洗い物をしている私が確定するので、現在の私は思う存分ダラダラすることができるのである。

おもむろにソファから立ち上がり（ついに洗い物をやるのか？）と見せかけておいてトイレに行ったり、シャワーを浴びたりして裏切りの展開を入れるのも期待値が上がって良い。そう

して散々洗い物を放置した挙句、「待たせたな」「もう大丈夫だ。私が来た」などと言いながら洗い物を始めれば、つい先ほどまでダラダラしていた自分が汚れた皿を救う大物ヒーローに様変わりだ。洗い終わった時のカタルシスもひとしおである。

「トイレの隅に溜まったトイレレットペーパーの芯が跡形もなく消え去る、それはまだ少し先のお話」「手が届かない棚の隙間に落としたりした箸が我が手に戻る、それはまだ少し先のお話」「半年以上捨てそびれている不燃ゴミを、ついに捨てられる日がやってくる、それはまだ少し先のお話」「途中で行かなくなったので気まずくなっている歯医者予約の電話を掛けられる、それはまだ少し先のお話」と、私は数え切れないほどの「まだ少し先のお話」を所有している。こうしている今も期待値は上がるばかりだ。

めんどくさがって飛ばずにいる鳩を追い込むように予定を入れる

カルディでワイン・生ハム・ティムタムと三種の神器を手に入れし者

カルディへ行ったSが、レバーパテの缶詰を買ってきた。きっと誰にもあるのだろう、心に余裕が生まれた時にふと、カルディへ行って今まで食べたことのないものに挑戦したくなる時が。ああ、Sは今日がその日だったのだなと思うと、レバーパテ記念日をお祝いしたい気持ちになった。

レバーパテというものに興味はあった。お金持ちの人が、豪邸や家用ジェットのおかげで優雅に食べているイメージだ。いや、それはフォアグラだったかもしれない。どちらにせよ馴染みがないのは確かだ。

せっかくのレバーパテ体験を最大限盛り上げるために、西友にワインとチーズを買いに行くことにした。イメージ的にオリーブも仲間に入れたかったけれど、1瓶食べられる自信がないのでやめた。Sが、「よく映画に出てくるお金持ちは、大きな白い皿に野菜のボイルしたやつとかをチョロつと載せている気がする」と言うので、確かに見たことがあると思って、普段あまり買わないアスパラガスやパプリカをカゴに入れた。

ワイン選びでは「せめて700円くらいするワインにしたら」と勧めるSを振り切り、いつもの400円のワインを選んだ。Sが「そんな下層ワインでいいの？」と言うので、「もちろん。

ワインに失礼でしょ、味の違いなんて私の舌じゃ分からないんだから。その分Sの飲みたいお酒を買えばいいよ」と逆に勧めてみたが、SもSで発泡酒を1缶カゴに入れただけだった。

チーズ売り場では、普段はさけるチーズとベビーチーズコーナーしか見ないSが、珍しく花畑牧場のチーズを選んだ。その後も西友に入っているパン屋の生フランスパンという何が「生」なのかよく分からないパンや、300円もするホテル食パン、浮かれた気分の人にしか買わないクラッカーなど、あれこれ入れていったらカゴの中が欲望でパンパンになった。

レジの表示金額が上がっていくのをハラハラした顔で見つめ、最終金額が七千いくら、と言い渡された瞬間思わず「えっ」と声が出てしまった。店員のおばちゃんがクスッと笑い、温かいまなざしを向けてくれたのでいくらか救われた。

結局、アスパラとパプリカはSの得意料理であるアヒージョになって、しっかりベーコンやきのこも入ってお金持ちの食べ物というよりは外国の郷土料理っぽくなった。生フランスパンも大皿に山盛り積んで、トースターで焼いては食べ焼いては食べしていたら、欲深い家族の朝食バイキングのようだった。最後まで生フランスパンは何が「生」なのか分からなかったけれど、柔らかくて美味しかった。

レバーパテはパンやクラッカーに塗って食べたが、Sが「ペディグリーチャムみたい……」と言うので気分が台無しになった。誰もがそう思うけれど、決して言ってはならない約束なの

だ。言ったらカルデイの魔法が解けてしまう。

その後魔法が解けたレバーパテは、薄焼き卵と一緒にサンドイッチにしたりアボカドに乗せて食べたりと工夫はしているけれど、2缶セットだったのでまだ1缶丸々残っている。

以前も、Sが成城石井で400円近くするトリュフポテトチップスを買ってきたことがある。Sに「どう?」と聞くと「3年前のわさびピーフみたいな味」と言う。何枚かもらって食べたけれど、もう3年前のわさびピーフとしか感じられなくなつた。本来ならもっと相應しい家に行くはずだったのに、間違つてこんなところに来てしまったレバーパテとトリュフポテトチップスが気の毒でならない。

バゲットは全力で食え上顎を守ることだけに集中せよ

幸せじゃないけど「幸いです」と書くビジネスメールの手癖を真似て

母と文通を始めた。耳が聞こえづらくなったため電話が難しく、メールを打つのも苦手だと言うので、だったら手紙はどうかと提案したのだ。電話の代わりといっても、電話と手紙とでは話す内容が全く異なってくるのが面白いところだ。

電話では要件と、周辺でのコロナの状況を報告し合うくらいだったけれど、手紙を読むと「散歩していたらつくしが出ていた」「チューリップの球根を6つ植えたのにたった一つしか芽が出なくて残念だった」と季節感があり、母の生き生きとした日常の姿が伝わってくる。普段ならわざわざ話さないようなことでも、便箋という白い空間の、埋めなきやと思わせる力が大きいのだろう。私の相槌よりも便箋の方がはるかに聞き上手である。

ちょっとびびくりしたこともあった。前回の文通で、上白石萌歌さんのラジオで歌集を紹介してもらったことや『文藝春秋』に短歌が載ったことなど近況報告をした。すると返事に、「短歌や土人形がたくさんの手に取ってもらえてありがたいです。あなたの昔の夢がちよつとずつ叶えられているのが私はうれしく幸せです。何かを作り出して誰かに認められたいと言ったもんね。よかったね」と書いてあったのだ。

えっそんなこと私が言ったの？ と驚いた。確かに子どもの頃から作ることは嫌いじゃない

けれど、「夢」というのは自分には縁がない言葉だと思っていたのだ。

小学校の卒業文集の「将来の夢」を書く欄には、当時テレビでやっていたムツゴロウ動物王国の特番が好きだったので、「ムギムギ王国をつくる」と書いた。ムギムギとは、当時よくノートに描いていたパンダのオリジナルキャラクターのことである。もちろんムツゴロウさんのようにライオンに指を食われたり3億円の借金を抱えたりするような覚悟はなく、友達は「りんごの中に住む」と書いていた覚えがあるから、小6にしては幼く、呑気に生きていたのだろう。小学生以降に「夢」があったとすれば、王国とは真逆だが、「普通の人になる」ことだ。母も昔から「立派な人になれなんて期待はしないから、普通にやっつけてくれたらそれが一番」とよく言っていた。

大人になって自力で生活したり仕事を辞めたりするうちに、「普通」がこうもハードルが高いものかとおつくづく思い知った。地元の友達は、結婚して家を建て、親に孫の顔を見せているけれど、私から見るとムツゴロウさんくらい偉人である。

母には土人形や短歌のことを報告して、残念ながら「普通」は叶わなかったけれど、代わりに趣味でそれなりに社会と関わっています、という自分を演出していた。上白石萌歌さんや『文藝春秋』といった母にも伝わりそうな有名な名前を出したら、蓄積されたマイナスが減るんじゃないかという、いやらしい計算もあった。

しかし、思い過ぎだったのかもしれないと、手紙を読んで思った。私もいつかの昔、夢をみた人間だったのかも知れない。記憶なんて不確かで、後から入ってきた情報や今の心理状態によって簡単に書き換えられるものだ。「夢」も「普通」も「幸せ」も実体がない。今こうして便箋の中には「夢」や「幸せ」が存在しているのは事実で、なーんだ、と肩の荷が降りた気分だった。今までは「普通になれずごめんなさい」という罪悪感をガソリンにして動いてきたところがあつたけれど、きつと「夢」の方が燃費も良くクリーンエネルギーに違いない。手紙にある「何かを作り出して誰かに認められたいと言つた」の「誰か」の中には、きつと母も含まれていたのだろう。

手紙の最後には、前回の手紙と一緒に送つたバームクーヘンについて、「届いてすぐにお茶と一緒に食べて、次の日にはカルディのドリップコーヒーを濃いめに淹れて一緒に食べたら、それぞれ味わいが全く違うことに気付きました」と書いてあつた。母はなんて豊かに日常を味わっているのだろう。次の手紙には私も、日々のちよつとした発見について書こうと思う。

2を3に誤魔化すように歪でも続けていけば家族のかたち

ハッピーターンという怪物を生み出した罪は全て僕が引き受ける

西友のお菓子売り場で、Sが「ハッピーターン塩分30%オフ」という新商品を手に取っていた。「これハッピーパウダーちゃんといってるの？ うっすい塩の味しかなかったら嫌じゃない？」と袋に目を近づけて粉を確認すると、「品質確かめる覚醒剤の売人みたいだからやめて！」と止められた。「そんなにハッピーパウダーに目がなかつたっけ？」「いや、別にそんな事ないんだけど……」と言いながら、減塩に越したことはないかと試しに一袋買って帰った。

食べてみると、あれ？ ハッピーターンってこんなに美味しかったっけと驚いた。想像以上にサクツとしている。本当にこれで減塩なのか？ もう一枚食べる。やっぱりうまい。減塩だからといって劣るところも全くなく、むしろ完璧といつていい。ハッピーをいただけるだけでありがたいのに、減塩という免罪符までお与えになるとは。

ちなみにハッピーターンのパッケージに描かれた公式キャラクターの本名は「プリンス・ハッピー・ターン・パウダリッチ」だそう。高貴な王家のお生まれでハッピー領土を広げるために人間界にやって来たらしい。自分の中にあつた「何か大いなるものにひれ伏したい」という願望が、満たされていくのを感じた。2021年のフジロックのライブ配信で、平沢進を観たとき以来の感覚だ。

Sも「ハッピーターンは、食べたいより、得たいって感じなんだよね。もう一枚食べるというより、ハッピーターンにもう一枚を食べさせられている。ハッピーターンは魔法！」といつになく興奮していた。

家にあつたごぼう煎餅と比べると無くなるペースが全然違う。ごぼう煎餅だつてハッピーターンを食べる前までは、ごぼうの滋味深い味が美味しいと評判だったのに、『トイ・ストーリー』のバズ・ライトイヤーが来た時のウッディのように、すっかり立場が脅かされている。気の毒になってごぼう煎餅も食べるのだけれど、なんだか甘じよっぱさが足りないし、一枚食べれば十分だ。

いつしか、常に「ハッピーターン塩分30%オフ」が冷蔵庫の上に乗っているようになっていた。机の上に転がるいくつものハッピーターンの袋が、夏の蟬の抜け殻みたいに「死」を連想させる。

「死」「死」「死」。

これ、殺つたのって私？ 指先を見るとハッピーパウダーで汚れている。Sの「ハッピーターンにもう一枚を食べさせられている」という言葉が恐ろしく響く。まんまと「塩分30%オフ」の罠に掛かってしまったのかもしれない。

気づいたらもうハッピーは消えていて残った抜け殻をそつと舐める